

## 浜田義一郎・中野三敏・日野龍夫・揖斐高編『大田南畝全集』

久保田，啓一  
有明工業高等専門学校助手

<https://doi.org/10.15017/11991>

---

出版情報：語文研究. 61, pp.73-74, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 《紹介》

浜田義一郎・中野 三敏 高編 『大田南畝全集』  
日野 龍夫・揖斐

久保田 啓 一

恐らくは近世を通じて最も著名な人物、滑稽文学界最大の立役者として虚実さまざまな逸話に彩られた蜀山人大田南畝も、その名声の割に研究対象としては永らく不遇をかこってきた。研究の基礎となる、学問的に真に厳正な全集の有無という点に限っても、夙に『定本西鶴全集』や『校本芭蕉全集』の備わる西鶴・芭蕉に比べ、底本の選定や校訂に問題の多い『新百家説林』本全集に依らざるを得なかった南畝は、その真面目を見出される術さえ与えられないという状況にあった。それ故か、戦前までの南畝研究は、個別の書誌的研究や玉林晴朗氏の大著『蜀山人の研究』を除けば、真偽のほどの疑わしい伝説に振り回された興味本位の記述にほとんど終始している。機智と滑稽の冴えのみから南畝像を作り上げ、彼が生涯を通じて詠み続けた彫大な漢詩の群れには目もくれないでは、泉下の南畝も「世中の人には時の狂歌師とよばる、名こそおかしかりけれ」と苦笑を禁じ得なかったであろう。少くとも南畝の雅文芸が従来正當に評価されなかった理由の一つにこの全集の不備が挙げられる。

このたび、戦後の南畝研究を主導して来られた浜田義一郎氏を初

めとして、雅俗両界に跨る広大な南畝文学の裾野を鳥瞰するにこの上ない編者を得て、全く装いも新たな決定版『大田南畝全集』が行されることになった。全十六巻の予定で、内容の概略は次の通りである。第一巻は『万載狂歌集』以下の刊行された狂歌・狂詩・狂文集、第二巻は自筆草稿をも含めた未刊の狂歌・狂詩・狂文、第三巻から第六巻までは自筆の『南畝集』に代表される漢詩文集、第七巻は洒落本・黄表紙・喃本・評判記等の戯作、第八、九巻は大坂・長崎在勤時の書留『葦の若葉』『瓊浦雜綴』『瓊浦又綴』や任地までの紀行、及び日記を収め、第十巻より第十四巻までは、当時から借覧の申し入れが絶えなかった浩瀚な『一話一言』、天明狂歌界の動向を生き生きと伝える好資料『奴唄』を初めとする随筆、第十五巻は『雑録』として、公務の傍ら記した『銅座御用留』『長崎表御用會計私記』その他を収め、第十六巻には書簡・逸文集・叢書目録・年譜・著作年表・索引が付く。この構成を一覧すれば、南畝の表芸と目されがちな戯作・狂歌・狂詩・狂文が実は彼の文業のごく一部に過ぎず、日々倦まぬ詩文の研鑽と抄書、実直な役人としての生活に

支えられたものであったことが理解できる。戯作を常に雅文芸とのからみの上で読むべきことは、第二巻「戯作」巻末解説にも述べられている通りである。

現在、第一巻と第七巻が刊行されたのみで、全巻完結はかなり後のことになるが、とりあえず既刊二冊を通じて本全集の意義の幾何かをここに紹介してみたい。

まず注目されるのは、底本選定の周到さである。伝存する諸本すべての書誌を厳密に比較し、初印本もしくはそれに準ずる版をもって底本と決定する過程が解説によって如実に示される。各収録作品の扉うらにある底本の書誌も詳細をきわめ、安心して拠るに足る信頼感を読者に与える。戯作の書誌的研究は近年『洒落本大成』等により飛躍的に進展しているが、本全集はその成果を確実にふまえ、或いは第七巻所収『甲斐新話』の解説で伝本の一を旧蔵者の撮り合わせ本かと看破するなど、更に一歩進んだ見解を提示している。

また、書誌的な面のみならず内容に関する検討も行き届いており、これによって後人の仮託書や存疑の作が厳しく選別されている。疑問を残しつつも収録する場合は、例えば第一巻所収『狂歌百人一首』に見るようにその理由が明記される。ここに編者の見識が発揮されている。

以上のような収録作品の個別的な解説の充実ぶりに加えて、それぞれのジャンルの文学史的展開を手際よくまとめた総合的な解説が備わること、作品の読み方の指針が与えられるのも、読者にとって有難い。

なお、本全集の体裁は手頃な四六判で、一段に大きくゆったりと活字が組まれ、研究者だけでなく一般読者にも親しみ易いようにと

の配慮が窺える。それは原本本文をあくまで尊重しつつ表記は新字体を採用する校訂方針にも通じていることである。

『大田南畝全集』がその全容を読者の前に現わすにはまだまだ時間を要する。我々はその一日も早い完結を期待してやまない。そして南畝快心の筆の跡を味読する楽しみを与えてもらったことに感謝したい。

(昭和六十年十二月より隔月刊、既刊第一巻、第七巻 岩波書店 予約出版)

#### 前号訂正

本誌第六十号所載の『曾根崎心中十三年忌』の絵尽について・補正」において、4ウ(56ページ)と5ウ(57ページ)の写真が入れ違っておりました。お詫びして訂正いたします。

(編集部)